

感傷主義者の輪廻

白隠禪師と言えば、ただに禅門のみならず、仏教に志すものだれでも知っているほどのお大徳であるが、初めからお大徳であったのではない。禅師は、東海道原駅の松蔭寺という、いたって小さいいわゆる孫末寺で、雨が降れば屋内でも傘をささねば歩かれないという破れ寺、この寺に一切の利欲貪念を捨離して、伝来の向上の一着手を全提し、いわゆる「江湖の龍象を奔走せしめ、天下の王侯を聳動す」と言われるまで、その化風は一世を動かした。そこで松蔭寺をめぐる数里内は、廃寺も辻堂も参禅者の住居と化し、空前の大繁盛を禅門の上に招来せしめた。これほどの白隠も初めからそうではなかった。

白隠禪師が正受老人に参禅した時、何と答えても言うても、

「この穴ぐら仏法」

と怒鳴られる。一言開けば「穴ぐら仏法」、ついには室に入ればやられ、敷居をまたがぬさきから、この「穴ぐら仏法」を食わされる。そこでさすがの白隠も困りはて、幾度も逃げて下山しようとしたか知れない。けれども、その心と戦いつつなおも修行をつづけていたが、ついには老人から高い縁下にたたき落とされた。ところが、ある時、一人の老婆の家の前に、ぼんやり立った。すると老婆が、

「何もやるものはないから、他へゆけ！」

と冷たく怒鳴った。道を求めることに心をくだいている白隠は、老婆のこの慳貪な声も耳に入らないで、なおもぼんやりしていると、「この間抜け坊主、何をぼんやりしているのだ！」と突如、竹箒でたたいた。その刹那、白隠は豁然として大悟した。そこで白隠はおおいに喜び、庵に帰り、まだ門を入らぬ先に、正受老人は、これを見て

「そこだ！ そこだ！」
と印可を与えた。

この話について考えることができるのは、①正受老人の冷たき大慈悲である。②白隠の真実求道の大精神である。そこにもし、甘ったるい智慧の光らない、人間的な言葉や態度が出たならば、師弟ともに助からない。

「私は人生がさびしいのです。たった一人ぼっちなんですわ。」

「私はそのあなたに同情します。さびしいでしょう。ともに慰め合って……」

こんな調子のセンチャン同志のその行末はきまっています。

不断煩惱得涅槃と、不断の世界に生死一如を信証する仏教は、また横超断四流と「断」の一字に疑情迷心を絶つ、不断と断、ともに生きてそこに決定がある。道がある。

他人を愚視するの誤

聖徳太子の憲法に曰く

「いじろのこかり 忿 を絶ち、おそてのいかり 瞋 を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心有り……我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是みし非みするのことわりなんぞ 理、詎能く定むべき。相共に賢く愚かなること、みみがね 銀の端なきが如し。」

大賢は愚に似たり。われ一人賢くて、他は悉く愚者、愚いよいよ深くしていよいよ賢者智者をもつて任じ、言を荒くし、威をたくましくして諍論する。向かつては畏れ、追従する人はあり、糞よけにする人はあつても、面と向かつて誠むるものがない。いよいよ増長して、上る所を知らず。学ぶもおのれに帰つてわれを培うことなく、一言を誇り、寸智を弄ぶ。その行末や知るべきである。

「底ひなき淵ふちやはさはぐ山川の浅き瀬にこそあだ波は立て」(古歌)

大衆を愚かなりと見、大衆は浅薄なりと考へての運動は必ず失敗す。

古来仏教の大徳は、上れば上るだけ、一切を拝み、一切を尊重し、深い智慧に帰れば帰るだけ、下座におり愚者に帰り、一老婆すらその大悲の胸に抱いた。

「我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず。共にこれ凡夫のみ。」

善悪、智愚、すべてしかりである。善と高上りするは、悪の極み、賢と誇るは愚の極み、一片の我慢、ただいたずらに躍れるのみ。われこれをおそる。

新しがりの軽薄

何でも新しいのが優れており、西洋から来たのがよく、西洋人の名さえ列べたら賢いと考へて、日本は過去つらい毒を飲まねばならなかつた。

「仏教なんて、つまるものじゃない。われら若人はあんなものに用事があるか。」
2
幾度か青年新人たちの口から聞かされる。失礼ながら、仏教についてどれだけ研究したことがあるのだろう。仏教と言えは古い、自省と言えは古い、倫理は古い、何は古い、彼は古い、古いものは一切つまらない。新しいものは何でもいい。この種の人、何でも新しがる者は軽薄であり、ただいたずらに横に横にと、幅が広がって深みがない。一芸に秀で、一道に達する者に、かくのごとき軽薄者流は一人もない。

陋習るうしゅうの墨守

その反対に何でも古いのがよい。昔ながらの悪い因襲に囚われて、生命のない殻を抱いて守る。この種の人に発展はない。「日ニ進ムニ在リ、日ニ新ニスルニアリ」樹が太らなくなつた時は枯れた時、人が進まなくなつた時は退く時である。虚仮を抱いて虚仮と知らず、ただいたずらに旧来の陋習を守り、先人を通して改めずば、ついに時代よりおき去りに会うとともに、その人自身もまた、枯死せねばならぬ。人を苦しめ自ら悩み、白眼世をすねて、文化の流れを妨げる。七十歳の老僧、本堂において講演を許さず、昔ながらの説教を聞く者は老人のみ。この種の人三十四の若老人にもあり。生存の意義がどこにあるう。

岡本法師、六十二才の高齢をもつて、本団聖講習会に参加せらる。「我等の青年団長」の名はふさわしいかな。

独占意欲

独占意欲はだれにでもある。これが多いだけ人物を小さくし、世間を狭くする。門徒の独占、弟子の独占、知人の独占、地位、名誉、縄張り、女、食物、座席、学問、財産等々、それが増し、それが深くなればなるだけ、我執が増し、愛情がまし、怒りが増す。

積尊は、一切の所有を否定して無一物を体得し、その無一物中に無尽蔵を獲て仏陀となられた。

自分の所に集まる人を、他の人にとられまいとして、感情をもつて、親切をもつて、物をもつて、言葉をもつてひきとめて独占しようとするがごとき宗教人、その劣悪な心情をこそ、仏智によつて清算すべきである。でなければ、仏教の真髓を会得することもできないし、大をなすこともできない。

誤れる実践主義

「理論もいい。だが、われらはとにかく実践するのだ。」

かかる人には、ほんとうの意味の実践は不可能である。かかる意味の実践は、万人悉くせぬものはない。われらにかかる半可通の人たちの実践に真理性なく、確実性なく、永続性なく、幾多の醜き残骸の横たわっているのを見る。

時に行うも道であり、時に行わぬも道である。行くばかりが道ではなく、時に退くも道である。馬車馬式実践や、無茶苦茶流の実践は世を毒すること甚大。われらは行う前に、真理の使徒でなければならぬ。自己清算に忠実であり、己の本然の相に帰らなくてはならない。理想郷の出現を説きつつ、悪徳記者となつて、ゆすつて食うがごときは、悲惨の極みである。

求道を忘れたる仏教徒の実践化もまたしかりである。

実践なき大言壮語

世に実践なき人の大言壮語ほど困つたものはない。手は何をなせるか、足はどこを歩めるか、わが全身にはいかなる血めぐれるか。わが口にはいかなる言葉を出しつつありや。そこになんらの反省自知なく、しかも自らは大言壮語に時を空費す。この種の人の迎えられるところなく、仕事のできるためしなし。いずれの所も厄介扱いが関の山である。大言壮語が、その人の真価でなくて、そのなせるところが、その人の真価である。その信ずるところ、その心のありのままが相形すがたかたちの上に出るのであるがゆえに、遊んで大言壮語し、身を守ることすら知らず、遊蕩三昧、働くことを知らぬ者は、村の厄介者であり、よく考え、よく学び、村民と一致共同、よく着々と実行する者は、村の宝である。世の宝である。

柔らかならぬ強者

言動にゆとりがなく、柔和なところが見え、硬直なまがたくて、いたずらに反抗的であり、我慢を通すことのみを知つて、悪を知つて謝らず、非とさとつて悔いず、人を責めることに急にして、われを許すこと寛ゆめやかに、常に大道を歩まず、人に和せず、悪質の皮肉のみがその言動に出で、林のごとき静けさなく、腕力、智力、弁才を誇つていかな

る時にも優越の立場を去らぬ。偉人は尊ぶべく、奇人は笑うべし。偉人は柔かなること時に凡人のごとし。織田信長は何がゆえに滅びしか。

柔道とは体と心の凝りをぬいて、真の力を自然に活用する人を作る道である。仏法もまた柔道である。柔軟道である。

生ききる気概なき弱者

柔らかさのない強者がいけないように、気概のない弱者もまた、浮かぶ瀬がない。一生、妻に虐げられた男、一生一度も、心のままに生きたことのない人間、常に人の鼻息を伺い、その顔色を見る、いわゆる社交家は、弱き七面鳥の種族、この人に仕事のできたためしなく、その一日一日は生活ではなくて生存である。真価は土の底に埋もれ、個性は灰色に塗りつぶされる。教育学の命法よりも、村長の顔色を問題とする校長に真の教育なし。門徒の長き因襲と戦って、餓死すら厭わぬ僧侶によつてのみ、正法は高く掲げられる。

何等の使命なき生涯

なんらの使命を持たない人があるとすれば、それほど無意義な生存はない。希望は人を明るくし、使命は人を強くする。歓びのない生活は暗い。しかし使命を持たざる人の喜びは利己的である。もしなんらの使命を持たないならば、その人の生活は、必ずその中心点が人生享樂より一步も出ない。もし享樂が得られなくなり、逆境が見舞えば、三原山へと走る。死んでも死にきれぬ願いを持つ時、最後の一呼吸、最後の血の一滴までが使命のために費される。

ああ。なんらの使命観なき若人の群！何をか言わんやだ。墮落これにすぎたらない。

「大乘菩薩道を社会のすべてに承認せしめよ！」

われらの使命は簡単である。

以上十則、われ自らを誠むるの言葉である。あえて同胞におくる。